



愛

と

鼻

永代美知代

むかし昔ある都會の郊外に
一人の

百姓が住つて居りました。一寸と變り者で金持ちでしたが、非常に綺麗な美人の娘を一人持つて居りました。

ですから大學生達は大騒ぎです。日曜日には大勢で百姓の家を訪ねて、娘の機嫌を取らうとしましたが、娘は根柢から平氣で、誰にも笑顔を見せようとはしませんでした。

するうち書生さん達は考へました。

『これは何でも學校の休暇を利用して、親父の畑仕事

でも手傳つてやるに限る、其内には屹度美しい娘の笑顔も見られようと云ふもんだ』

せつせと働いてやりますと、百姓はすぐ書生さんの心を見て取りました。そして斯様約束を持ち出ししました。

『私は一つ皆さんと約束をしたいと思ふ。と云ふのはこれから一年、來年の夏不如歸が鳴く時分まで、家に來て働いて、兎に角其間は何彼につけて不平不足を云はない事、萬一不平不足を云つたらば、其時は容赦なく不平を云つた方の鼻の先を切り取る事、其代り私も亦一切不平不足は云ひません、間違つて云つたら最後直ぐ此鼻を切り取つて貰ひます』

『うや面白う』

『妙案だ』

書生さん達は直ぐ賛成してしまひました。併し元々腹に一物あつて持ち出した約束です、百姓は何だ彼だと言つては、兎角書生さん達の氣に入らないやうにはかり仕向けましたから堪りません、ついうっかり不平を云つては鼻を切られく、しまひには皆な逃げ出してしまひました。

或日コランダと云ふ若者が
百姓の

家にやつて來ました。此頃ではもう百姓の鼻切が評判になつて、誰一人寄りつかなくなつて居りますので、百姓は馬鹿にしたやうな様子でコランダを迎へましたが、例の約束を持ち出しました。

『承知しました。鼻を切られては大變だと云つて、随分友達から留められました、ナ、ナ、私に限つて大丈夫です』

『では早速畑へ行つて働いて頂きませう』

其日の晝食に、百姓はわざとコランダを呼びませんでした。コランダはそれと氣がつくと、こつそり家に歸つて、百姓の内儀さんの居ない間に、そつとハムとパンを盗み出し、畑に引返してたらしく御馳走になりました。

その晩仕事を仕舞つてから、百姓はコランダに訊きました。

『如何ですか』

『いや結構です、それに晝食には大した御馳走を頂きまして』

其處へ内儀さんが出て來て、

『一寸とおまへさん、ハムだのパンだの随分とつさり盗まれちやつたよ』

コランダは笑つて居まし

たが

百姓は怒つたやうな顔をして居りました。

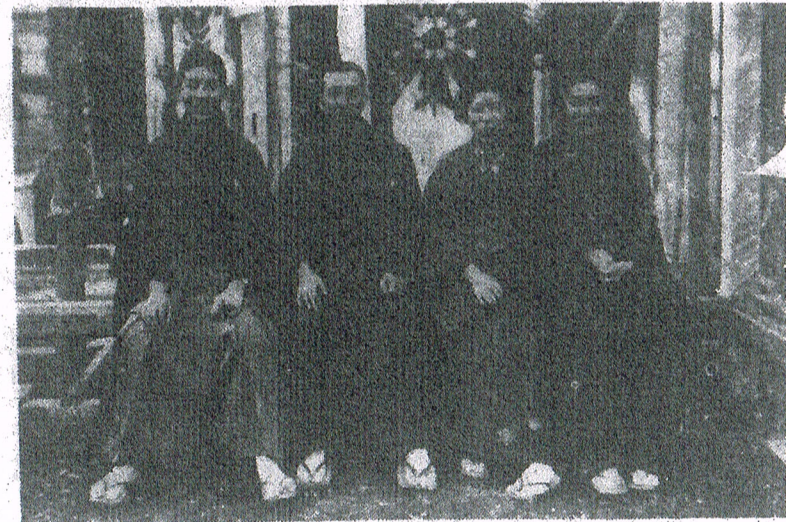
『何彼御不平な事でもおありですか』
コランダに訊かれると、百姓は周章で、打ち消しまし
た。

『いやナニ、ほんのハムとかパン
とか、そんな事は別段何でもあり
ません』

併しそれから云ふもの、コラン
ダは何時にも食事時に呼ばれないや
うな事はなくなりました。

日曜日の朝、百姓の家では家内
で寺院詣りをする事になりました
て、コランダは留守番をさせられ
ました。出掛けに百姓は斯様云つ
て行き来した。

『今日は君が料理番だからね、肉
を切つてね、玉葱だの馬鈴薯だの、
胡蘿蔔だの、其のバセリ、オランダ
の、其の奥いらにあるものを何でも皆細かく刻み込んで、



(新築の鎌倉別荘にニコニコを連れて来る若山左衛門君と其妻、右端は左衛門君の女中さん)

コランダは氣輕に返事をしました
が、後で何か好い惡戯はないかと
其處いらを見廻しました。すると
丁度好い都合に、百姓の家で大層
可愛がつて飼つて居る犬の名前が
バセリと云つて、野菜の名と同じ
でしたから、コランダはいきなり
犬のバセリを殺して皮を剥ぎ、其
肉を細かに刻んで、外の物と一緒に
大鍋に入れて煮込みました。
百姓の内儀さんは家に歸ると直
ぐ、可愛いバセリの名を呼び立て
ましたが、バセリはもう出て來や
う譯もありません、そしてコラン
ダに殺されて煮られたのを知りま
すと、内儀さんは堪へ切れないで泣きました。

『此人鬼奴！何をしたんだ！』

『私は唯命令された通り、肉と玉葱と胡蘿蔔と韭とバ
セリと、其丈のものを大鍋で煮込んだ丈ですが――』

『だつて君は、何だつて私達の大事にして居た小犬を
殺したんです、怪しからん』

百姓は大きな聲で嗚鳴りました。

『では御不足なのですか』

云ひながらコランダはポケットの中からナイフを取り出
しました。

『イヤナニ』百姓は周章で、『死んだ犬は死んだ犬で
すよ何でもありやしませんさ』

其後又百姓夫婦は家を明 けて

市場へ行かなければなりません。かなり暇取る
用事で終日歸つて來れさうありませんけれど、併し
うっかりコランダに用事を云ひつけて、又どんな間違
ひを仕出來されないものでもありません、これは何も

して貰はないに限ると思つたので
『今日は終日家に居て下さい、そして他の人のする事
をよく見て居て、都合でまあ皆なのする通りにして置
いて下さい』
『承知しました』
コランダは例の氣輕な調子で返事しました。皆なの出
て行つた後で、コランダは腕を組んで考へ込みました。
『何か好い惡戯はないものかなあ』

丁度其日百姓の家では大工 が入つて

庭の隅の古ぼけた小舎の屋根をはがして居りました。
コランダはこれ幸と手を拍ちましたが、いきなり母
屋の屋根に這ひ上つて、まだ眞新しいやうな屋根板
をめぐつては投げ、めぐつては投げ、とう／＼夕方ま
でにすつくりの青天井にしてしまひました。

『惡黨！』

百姓は歸つて來て思はず嗚鳴らないでは居られません

でした。

「何故ですか、私は何故そんなに怒りになるのか解りません、別段何もしないで好いから、唯他の者のするのを見て居て、其の通りにしろと仰有つたので、其の通りしたばかりですが、お氣に入りませんかですか」

コランダはポケットをさぐつてナイフを出しました。

「いやいや」百姓はうめくやうに云ひました。

「今に大工が来て又新しく屋根を造つて呉れるからよろしい、ナ」

強て何氣ない様子で

話さうとはするけれど、百姓は内心非常に怒つて居りました。ですから其夜内儀さんに相談をかけました。



(なが永日る居き聞れす葉の間の釣)

「如何したらあの忌々しい奴を追ひ出せるだらう？此儘すつと家に居ると、どんな恐ろしい事を仕出來すか知れたものぢやない、屹度俺の此鼻を切るつもりなんだよ」

すると其話を聞いて居た娘が云ひ出しました。

「お父さん、元々これは私のせいですから、私があのコランダを追ひ出して見ませう、お父さんはあの人と約束して、來年の夏不如歸が鳴く頃までと仰有つたわけね、だから私裏の果樹園に隠れて居て、不如歸の鳴真似をして見ます」翌日の朝早く、果樹園の方で何かしら鳥の鳴聲が聞えました。「オヤ何でせう？」

コランダが訊きました。「不如歸ですよ、其處で君、約束の日が來ました、もう

う歸つて下すつてよろしい、併し永い間よく働いて呉れましたね」

「ワハハ、此冬枯に不如歸が鳴くとは不思議です、ね、兎に角不如歸は私の大好きな鳥です、行つて見て來ませう」

コランダは果樹園をさして駆け出しました。そして力一杯樹を振りますと上から娘が落ちました、コランダはそれを抱き留めました

「惡黨！」

百姓が嗷鳴りながら駆けつける、内儀さんも一緒にわめきました。「性惡奴！」



素展懇親會

豫て報じてあつた素展懇親會は玉塚井上の兩幹事の幹旋によつて去月十二日の夜烏森の湖月に於て開かれた。會する者約二十名、特に素展に盡力せられた江木博士和田垣博士佐々木博士上原六小野賢一郎松崎天民生田榮等の諸氏に出品者及びニコニコ俱樂部同人を加へ、大いに懇親の實をあげた。ニコニコは時過散會した、席上趣味ある談話、揮毫等、特に玉塚氏が天保錢主義に關して力説せられたことは、大いに我意を得たものであつた。紙面の都合上來月號に掲載する事にした。上圖は同席上の光景。

「惡黨！君は俺の娘を殺さうと思つて、殊更そんな事を訊くんだらう、御不足ですかもへつたくれもあるもんか」併し可愛らしい不如歸です」

コランダは素知らぬ顔をして

娘を見入つて居りました。

「何でも可い、君に用はない、歸つて貰はう」

百姓は眞赤になつて嗷鳴り立ちました。「だがその前には是非あなたの鼻を切つて行かなければ

なりません』

コランダがナイフを出しますと、今日まで他人の鼻を切る事を平氣でして居た百姓も、流石にぞつとして、泣く様に頼みました。

『ま、まあ待つて下さい、鼻の代りに羊を十頭あげますから、それでどうぞ勘弁なすつて下さい』

『いや、私は羊なんか些少とも望みません、約束は約束ですからね、兎に角お鼻を切りして貰ひます』

『では牡牛を十頭あげますから』

『私はお鼻が欲しいのです』

『お父さん！』

突然娘が呼びかけました。

『事の起りは私ですから、私が片をつけませう』そしてコランダの方を向きまして『コランダさん、あなたお父さんの鼻の代りに私の手をお執り下さいませんか？』

『私は元々その爲めにか宅へあがつたのですもの、よござんすとも』

コランダは直ぐに答へました。

『ではそれで片著きましたのね、ですけどもコランダさん、私達は又新しく同じい約束をしなければなりません、結婚後第一不平を云つた者が鼻を切られる事にね、よござんすか』

『よろしいとも！』

其後コランダと其花嫁の家庭の

圓滿な事と云つたら、他に例もありません、二人共いそ一度不平がましい言葉を云ひ合つた事はありませんでした。ですからコランダ夫婦は愛も失はず、鼻も切られず、仕合せな一生を送りましたと云ふ。

——(なほり)——